

『歴代宝案』 訳注本第十三冊の刊行に際して

沖縄県教育委員会

教育長 津嘉山 朝祥

沖縄県は、かつて琉球王国を形成し他県に例を見ない独自の变化に富んだ歴史を歩んできました。日本本土や中国、韓国、東南アジア諸国とほぼ等距離の位置にある琉球王国は、これらの国々の政治、経済、文化等から大きな影響を受けながら独自の歴史を形成してきたのです。

なかでも中国との進貢・冊封の関係は、沖縄の歴史や文化に大きな影響を与えました。一三七二年、中国の洪武帝は琉球へ使者を派遣して、明国の建国を告げ、入貢を促してきました。これに心えて琉球国中山王察度は、弟の泰期を派遣して進貢品を納めました。こうして中国との進貢貿易、正式の国家間交渉が始まりました。以来、明治の初年にいたるまで、琉球と中国の約五〇〇年間に及ぶ親密で長い交流の時代が続きました。

琉球国は中国との進貢貿易を軸にして、十四世紀からおよそ二〇〇年にわたり、日本、朝鮮国、シヤム・パタニ（現在のタイ）、マラッカ（現在のマレーシア）、スマトラ・パレンバン・スンダ・ジャワ（以上現在のインドネシア）、安南（現在のベトナム）等の国々と交易を重ね、東アジアの一大貿易国家へと発展しました。

これらの国々と交わした外交文書は、原文書あるいは写しや控えなどの形で外交を専任する久米村の天妃宮に保管されてきました。しかし長い年月の間に、これらの筆写文書や控文書も破損・散逸の恐れが生じたため、首里王府は久米村にその編集を命じました。こうして一六九七年に『歴代宝案』第一集四九巻が二部作成され、首里王府と久米村にそれぞれ保管されることとなりました。この第一集には、一四二四年から編集時点の一六九七年までの外交文書が収録されています。その後、一六九七年から一八六七年までの琉球・中国間の往復文書は、『歴代宝案』第二集二〇〇巻・第三集一三巻として編集され、ほかに別巻八冊（うち、第二集目録四冊）が編集されています。

しかしながら、首里王府に保管された『歴代宝案』は、廃藩置県の際に明治政府に引き継がれたといわれますが、いまだにその所在は不明です。また久米村に保管されたものは、一九三三年に旧県立図書館に移管されましたが、去る沖縄戦で散逸し、影印本と写本が数種残されているだけです。

沖縄県は、平成元年度（一九八九年）から、これらの影印本や写本を元に『歴代宝案』の編集事業に着手し、平成三年度（一九九一年）から刊行を開始しました。

この編集事業の目的は、『歴代宝案』が、中・近世のおよそ五〇〇年にわたる外交関係往復文書で、沖縄の対外交貿易史および外交交渉史を解明するうえで第一級の史料であり、東アジア世界の動向をも知りうる貴重な史料であること、膨大かつ難解な史料であるが、本文を校訂し、訳注本を作成して、これを利用してしやすい形に編集することによって、今後の歴史研究の進展に役立て、あわせて一般への普及を図ることと、国際化時代における県勢発展の基礎資料として活用できること、であります。

訳注本は、校訂本の漢文本文を全文読み下し文に改め、必要に応じて語注やルビを付したもので、『歴代宝案』の理解を補完する目的で全十五冊の刊行を予定しております。これまでに訳注本第一・二冊及び第三冊を刊行し、今年度は訳注本第十三冊を刊行することになりました。

内容は、道光二十一年（一八四一）から道光三十年（一八五〇）の間の、進貢・接貢・謝恩・唐船の漂流・琉球漂着民の送還などの貴重な中国との往復文書が収録されています。

最後になりましたが、本年度の訳注本の刊行につきましては、沖縄県歴代宝案編集委員会及び沖縄県歴代宝案編集調査委員会の御尽力、御協力を得ました。また訳注にあたっては、担当された西里喜行先生をはじめ、多くの皆様の御協力をいただきました。心から感謝の意を表して刊行のことばといたします。

平成十四年（二〇〇二）三月